

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 52 2011.7.15

第6号(24年10月号)から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で62年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

人生意気に感ず

松村吉太郎苦闘史

北原 燎 三

「松村さんが来たから榊井を呼べ」

若い、はりのある声であった。中山教長はまだ二十一歳の青年であった。

夏の日はまだ暮れていたが、大和特有のむんむんする暑さは逃げそうにもなく、蚊いぶしの煙までが、いらいらと暑さを刺戟した。



吉太郎がその日、河内の教興寺の自宅を出たのは午すぎである。勤めの役場がひけてから信貴山越えで大和に入り、日盛りの田舎みちを、汗にまみれて、おちばに着いたのであった。

「松村さん、ご苦労やったなア。暑かったやろ。さあく、蚊長に入って、ゆっくりお話をさしてもらおう……」

おやしきの人々は、親兄弟のように親しみが深かった。中山教長より一つ年下の吉太郎は二十の青年、火のような求道心に燃えて、毎週、土曜から日曜にかけてのおちばまわりを欠かさなかった。

やがて、青蚊長の中に、榊井を中心にして吉太郎の他に二三人の青年たちが、片肌をぬいで、うちわを使いながら聞き入るのであった。夜が更けても、うちわが動いていた。朝になっても、蚊長の中のお話会は解散されなかった。

こうして、土曜の夜と、日曜がまる一日、吉太郎は聞けるだけの話を聞いて、月曜の朝は未明に出発して、九時の役所の時間までに帰って行くのであった。

吉太郎の両親と弟とは、彼よりも早く信仰に入った。ことに両親と中山家とは親戚の間柄にあつたので、おみちの人々の出入りは多かつたが、頭のよい、そして知的な彼は、理論ばかりで押し、まるで受け入れようとはしなかつた。

十九の春、吉太郎は悪性の肋膜炎にかかった。医薬の効がなく、だんだんと悪くなる

ばかりである。両親と弟とは、この時とばかり信仰をすすめた。

「それでは、試しに信仰してみよう」といった。すると、そこに居合わせた村中の講社の一人が、

「あなたは理屈のわかる人にも似合わぬ訳のわからんことを云う。よう考えてみなはれ人間でも、加減みに頼んでくればまつか。神様もそれと同じことだす。試しに信心して、神様から十分の御守護をいただけそうな筈がないではありまへんか……」

吉太郎は返事に窮した。しかし、なるほどと思った。そうして、吉太郎の胸にこの日から、信心の火が燃えた。肋膜炎は、またたく間に、なおってしまった。

時代は明治二十年代である。このころ、新しく起つた天理教と、仏教との間には、絶えず争いがあった。あちらで、「天理教撲滅講演会」をやるかと思えば、天理教側も黙っていずに「撲仏大会」をやるという風で、特に河内一円は、それが激しかった。(後略)

信仰例話 (道友社刊『真実の道』より)

なんでも

A子さんは横浜に住居していたが、空襲のため何回となく焼け出され、終戦の時は北海道に疎開していた。夫は浄瑠璃の三味線ひきであったが、当時の逼迫した世間の状態では、糊口すべくもなく、さる木工場の人夫として、昨日まではバチを持った手でオガクズ運びの荒仕事に従事していた。

しかも、この困窮のさ中、戦時中、無理に無理を重ねて来たA子さんは、既に肺を犯されていて、様態は急変し、医師三名から絶望を宣告された。再起不能の悲しみに、一家はうちひしがれたが、或る夜明A子さんは、ふと横浜時代におまいりした天理教会のことを思い出した。そしてそ

の時間いた、偉大なる教祖様のお墓地の草の一本でもひかして頂きたい。そしたら助かるかもしれないという気がおこった。そう思うと、もう矢も盾もたまらなくなつて、まだ見ぬお地場帰りを夫に懇願した。有為転変に会い、具に辛惨をなめてこの頃ようやく信仰心のきざしていたA子さんの夫は、この言葉に胸をうたれたが、勿論許しはしなかつた。しかし途中で死んでも本望だという熱意に動かされて、ついに丹波市までの切符を買い、涙をのんで彼女を汽車まで送ったが、それから毎日、今か今かと、死の電報が入るのを恐れて暮らしていた。

一月たつて、玄関に聞き馴れた奥さんの声したが、子供は母ちゃんの幽霊が来たとい

脅えて出て行かなかった。そこで夫のMさんが出て見ると、血色のよい見ちがえるばかりに恢復した奥さんが微笑んで



いた。奥さんの話によると、発車する頃はもう今にも息

が絶えるかと思われたが、函館をすぎ、東京をすぎ、お地場に近づくとつれて不思議に元気が湧いて来て、とうとうお地場の土をふんだ時には、有難くて有難くて泣き伏してしまつた。それから詰所に行くと、先生が、

「お地場というところは、来ようと思つて来れるところではない。あなたが、誰かからすすめられたわけでもないのに、しかもその身体で来られたのは、それこそ教祖様が貴方の手を引いて来られたのだ。道の用木として引寄せられたのです。だから是非お授けを頂いて、お助けに出さして頂かねばなりません」といふことであつた。

そこでA子さんは、九度のお席を運んでお授けをうけ、心に誓つたお墓地の草引もさせて頂き、丁度一月たつて、無事、奇蹟的な御守護を頂いて帰道されたのであつた。爾来、A子さんは毎日おたすけに運ばれている。聞書石も立木もと見込が付いたら、石の長持を拵えて隠れていたとて神は引き出して見せる

お言葉

養徳社 よもやま話

昨年の夏、ゴミ拾いをしながら陽気誌を配り歩いた。

二時間ほど歩いたが、ゴミ袋に気づき感心される方がある一方で、天理教と伝えると頑なに拒否する方もあつた。

東日本大震災後、生きていく意味や命について考えさせられる映像が流れた。心の支えとなるものを失つた絶望的な状況でも生きる為に、助け合う姿が尊く、印象的だった。

長く続く復興への道程を思い、何も出来ずに悶々としている時だった。ある記事で宗教者が震災という現実をうけとめ、悩み考える事により歩を進めるといった文章が目にとまった。宗教者が自らの信仰と役割を問ひ直す内容だった。

今年もおいがけ推進週間が近づいた。今回は震災後の世の中の動きより学び、何ができるのか考えたい。(弘)

○……八月号に宮城県の救援活動の記事を掲載しています。ボランティアをしながら被災者の方々の話を集めたものです。

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社

第1回公募

養徳社エッセイ賞

作品集 募集

選者 出久根達郎 (直木賞作家)

枚数 400字詰め原稿用紙8〜10枚

締切 平成23年8月31日

入賞 一等正賞楯 副賞10万円 (二名)

佳作正賞楯 副賞3万円 (二名)

※詳細は『陽気』8月号75頁をご覧ください。